

# 横光利一「機械」論

—ある都市流入者の末路—

田 口 律 男

## はじめに

横光利一は、昭和三年十一月、へある長篇の序章として、「風呂と銀行」と題する短編小説を『改造』に発表する。これは、後に、横光の処女長編小説となる「上海」の冒頭部分を構成する作品だが、これ以後、横光は、二、三ヶ月の一定した間隔で、同誌に続々と連作の短編小説を発表してゆく。そして、昭和四年十二月発表の「海港章」末尾において、へある長篇の第五篇、及び前篇終りとしたために、連作の筆を一時休止する。次に再び続篇が『改造』に掲載されるのは、昭和六年一月で、その間、約一年のブランクがある。へ長篇の連作とその改稿は、以後も続いていくが、さしあたって今はそれを追わない。本稿で問題にしてみたいのは、へ長篇の執筆を小休止した昭和五年の約一年のブランクの間に生みだされた作品「機械」である。

「機械」は、いまさらことわるまでもなく、横光文学を代表する著名な作品の一つである。私は、以前に、この作品を「時間」(『中央

公論』、昭6・4)と比較した際に<sup>(注1)</sup>、簡単な作品理解のデッサンを試みたが、論の性格上、細部にわたって作品分析を展開することができなかったため、本稿でそれを試みたいと思う。その際、問題意識として浮かびあがってくるのは、保昌正夫氏がつとに提起していた<sup>(注2)</sup>、横光の昭和五年時のへ突然変化<sup>(注3)</sup>の再検討ということである。一般に「機械」は、へ新心理主義による作品と色わけされ、新感覚派文学の挫折→新心理主義文学への転換という簡略な見取り図が何の反省もなしに用いられる傾向にあった。しかし、それは、横光文学の軌跡を表面的にしか辿らないものの憶説に過ぎないだろう。保昌氏は、へ……『上海』と「機械」とはまるっきりかわりのない作ではないとして、「機械」の成功が「上海」の後篇や「寝園」執筆へと向かわせたこと、「上海」には既に「機械」に通じる心理描写が見えること、昭和五年以前に横光には独自の新心理主義理解があったこと、などを述べ、先のへ突然変化の説の是正を行なおうとしている。

この見解には、基本的には賛成だが、しかし、作品そのものへの言及が不足しているため、やや説得力を欠く憾みが残る。よって、私た

ちは、もう一度、「機械」の作品世界を細かく検討していくことよ  
って、その内実がいかなる質を持つものであるか、また、継続執筆中  
であった「上海」とはどのような内的連関性を持っているのか、とい  
うところまで考えてみなくてはならないだろう。ともかくも、作品世  
界の内質を闡明することが先決なのである。その際、私が考察の道標  
にしようと思うのは、一九二〇年代における「街」(都市)の出現と、  
それに伴う人間関係の動揺と錯綜、状況と個人の問題、世界の認識の  
変容、といった、それぞれが互いに緊密に関連しあっているいくつか  
の項目である。これらは、横光が新感覚派文学運動を展開している時  
から、一貫して追求してきた問題であり、「上海」にはもちろん、作  
品「機械」の内部にも確実に根をおろしているし、それどころか、よ  
り鮮明な面貌すら持ち始めているとさえ思われるのである。

以上の道標をにらみながら、とりあえず、基礎的な作業になるが、  
作品に登場する人物を吟味するところから始めることにしよう。問題  
は、そこに、おのずと浮上してくるはずである。

## 一

まず、作品の冒頭において、唐突に語りを開始する「私」とは、如  
何なる人物であるのか。彼は、人が一般にそれに従って生活するところ  
の価値基準や行動原理といったものを、初めから所有しない人物と  
して我々の前に登場しているようである。

たとえば、冒頭の自己の来歴を語った部分、(「実は私は九州の造船  
所から出て来たのだが、と、途中の汽車の中で一人の婦人に逢つたのが

この生活の初めなのだ。)>「私」もまだどこへ勤めるあてでもないとき  
だしひとつはその婦人の上品な言葉や姿を信用する気になつてそのま  
まふらりと婦人と一緒にここの仕事場へ流れ込んで来たのである。)(  
傍点、引用者。以下同断)これら回想的言辭は、それが厳密な過去の再  
生を意図したものではないことを割引いたにしても、やはり、「私」の  
生活態度の恣意性・曖昧性を我々に印象づけずにはおかない。作品の読  
みが精緻になつてきた今日、この点に留意しようとする向きがあるのは、  
「私」なる人物を知るうえでも、また、作品「機械」の書かれた時代  
状況を把握するうえでも重要なことであると考えられる。

なかでも、瓜生清氏の「無定見」と呼ぶにふさわしい存在  
>社会的に疎外される以前に、自分で自分を疎外したと言えそうな  
《無頼の徒》>という把握の仕方(注4)や、高橋博史氏の「自己の行動に一  
定の方向を与え、様々な事柄の重要性の判断の基準となるもの、総じ  
て、人が自己をとりまく世界について、一つの世界像を創り上げる時  
その世界像を根底で支える価値、それが《私》には欠けているのであ  
る。単に欠けているばかりでなく、通常《よくある》世間の人間が、  
暗黙のうちに前提している類の価値を拒否している人物、それが冒頭  
に描かれている《私》だと言える」などという見解(注5)は、注目に価する。  
確かに、勤めるあても決めずに、九州の造船所をやめ(どういう理  
由でやめたのか?)、目的もなしに上京する「私」の姿勢や、車  
中での偶然の出会いによって、職業を選択する態度には、「定見」と  
いったものが感じられないし、「疎外」されたもののイメージもつき  
まとう。加えて、「世間の人間」の持つ生活の「価値」観からも切り  
離された特異な存在としても映ってくる。こうした特徴は、「私」の

行動をつぶさに眺めてみると、もっとはつきりしてくるが、それは後段で問題にするとして、ここでは、「機械」論で問題にされた「私」の「ゲーム性」(江後寛士氏)という、「私」のもう一つの特徴について少し考えておこう。

江後氏の所論は、<sup>(注7)</sup>「私」が、ネームプレート製造所内に繰りひろげられる人間関係のなかで、「自分を心理的なかげひきの場で遊ばせていることを重視し、「生活的不害を離れてゲームを楽しんであるもの」」という規定を与えたものであった。(この考え方は、最近の論考である宮口典之氏の「ゲーム的心性」<sup>(注8)</sup>という考え方にも受け継がれていて、重要な視点であると考えられる。)ところで、この「ゲーム性」という特質も、やはり、先程の「私」の価値基準・行動原理の恣意性、曖昧性と連関していることに留意すべきであろう。つまり、生活していく上での価値基準・行動原理が曖昧で不分明なために、他者が生活をかけて真剣に行動している姿も、歪曲した奇妙なイメージとなって映ってしまい、それを戯画化・「ゲーム」化してしか受けとめられないという心性が基底にあるようなのである。

たとえば、「赤色プレートの特許権」に関する相談を主人から持ちかけられた「私」は、経済的実権を握る細君や古参の軽部から執拗な監視を受け始めるが、その時の態度は、次のようなものである。へそこで私もそれらの疑ひを抱く視線に見られると不快は不快でも何となく、面白く、ひとつどうすることか図々しくこちらも逆に監視を続けてやらうと云ふ気になつて来て困り出した。ここで、「私」が「何となく面白く」感じてしまうのは、細君や軽部の「疑ひ」が彼らにとって実に真剣なものであり、しかも、それらが実のところ「私」とは何の接点も結ば

ない(自らの内部に、そうした生活上の利害に拘泥する素地がまるでない)ことを実感する時、生活者の真剣さは、愚直な戯れにしか映ってこず、故に、「私」は、事態を「ゲーム」としてしか受けとめられなくなるのである。

しかし、「私」は、面白がりながらも、そうやって生活とかみ合わず、「ゲーム」へと巻き込まれていく自分に「困り出し」でもいる。生活していくうえで価値基準・行動原理が曖昧で不分明であるが故の、空虚な「ゲーム」への転落である。「私」の「ゲーム性」についてのこうした考え方は、重要な問題となるが、しかし、なぜ、「私」がこうした奇妙な磁場に立たされ、空虚な行為に耽っていなくてはならないのかという問題についても考察を加えなくてはなるまい。この点について、作品「機械」は、それほど饒舌ではなく、単純明快な解答を与えてくれそうにないが、作品が書かれた当時の時代状況や、小説の記述の細部に留意する時、いくぶん説明のつく部分も見えてくるのである。

以下、気づいたことをいくつか列挙してみよう。

(1) 都市化にもなう地方から都市への人口流入と、地縁・血縁の人間関係の崩壊の兆候、及び大衆化社会の出現。

作品の舞台になっているネームプレート製造所は、東京にある同族経営の小規模な町工場といった風情である。従業員の数、作品に登場するところでは、軽部と「私」、そして作品後半で、よその製作所から助人としてかりだされる屋敷を含めて、三人に過ぎないようである。(経営には細君も参加している。)このうち、軽部は、「細君の実家の隣家から来てゐる男」とあるので、まだ、このネームプレート製

造所との間に地縁・血縁関係を有しているが、へ私へや屋敷に至ると  
すでにそうした地縁・血縁関係からは切れてしまつて、単なる賃金労働者として働いているに過ぎない。特にへ私へは、へ九州の造船所へをやめて上京してきた労働者であり、当時（一九二〇年代）、このように、都市へ流入する労働者人口が急激に増加する傾向にあつたことを関連づけて考えてみる必要があるだろう。

東京の人口増加率を眺めてみると、大正六年（一九一七）に急激な増加（前年までが約一・〇％増であつたのに比し、十四・五％増という驚異的な増加率を示す）をみると、以後は、全国の人口増加率が平均一％台にとどまるにもかかわらず、異常な増加率で増え続け、「機械」が執筆された昭和五年（一九三〇）には、東京都の人口、約五百四十万人、そのうち約半数以上が、地方からの人口流入によるものであつたことがわかる。

同時代の今和次郎編『新版大東京案内』（昭4、中央公論社↓昭61・7、批評社より覆刻）によると、へ漸次に安定を得つゝある新東京は、現在五万里餘の広さに、二百十餘万の人口を吸収してゐる。それに大東京の区域を含めると、その倍即ち四百万を遥かに突破する人口数である。（中略）／さて、わが東京は、色んなものゝ中心地である。宮城は森殿に都市中心にある。それをとりまいて諸官衙がある。議事堂がある。経済の中心としての銀行、会社取引所、工業都市としての各種大工場。それらに附随して当然住宅地、散歩街乃至盛り場、百貨店及商店。そして上流邸宅の構へと貧民窟、病院、市場、劇場、映画館、旅館、料理店（中略）／晴れた大空の下のそれらの展列は、大志あるものは、いな出世せんと欲する者は来たれ！ 知識を求めんとする者は

は来れ！ 享楽に浸らんとする者は来れ！ と呼びかけ、また曇つた大空の下それらの展列は、職を求めんとする者は来れ！ 来れ！ 来れ！ とてまいねいマイネイてゐるのであるとあり、急激に膨張していく東京の姿が明瞭に浮かびでているのである。

へ私へなる人物は、こうした、都市へ殺到する圧倒的多数のへ職を求めんとするものゝ達の一人であつたというふうにかけてもさしつかえあるまいと思われる。そして、同じ都市流入者ということ言えば、軽部もやはりそうだろうし、へ私へが汽車の中となり合わせた婦人——へ五十歳あまりになつてゐて主人に死なれ家もなければ子供もないので東京の親戚の所で暫く厄介になつてから下宿屋でも初めるのだと云ふへ女性もその一人と考えられるのである。また、作品後半で、このネームプレート製造所に舞い込むへ全町のネームプレート五万枚を十日の間にせよというへある役所へからの依頼も、ややこじつけの嫌いはあるが、急激に膨張する都市の性急な要請と見えなくもないのである。

こうした膨張する都市の背景としては、第一次大戦による甚大な軍需景気が主な要因として考えられるが、すでに昭和四年（一九二九）には、世界恐怖に歩を合わせた経済不況によって、失業者の数は増加の一途をたどり、資本主義経済体制の矛盾は深刻化し、社会不安が蔓延し始めていた。こうした状況のなかで、都市へ流入し続ける労働者達は、果たしてどこまで主体的な人間としてあり続けられたであろうか。地縁・血縁から切断されたところで、生活の糧を得るために、自らの労働力をながしかの賃金に変換する都市生活者の生活の不安と虚妄は、なにも現代に特有の事象ではあるまいと思われる。私たちは、

横光の他の小説（新感覚派時代のいわゆる「へ街」もの）を中心とする）にも、そうした、主体性を喪失し、虚妄な、そして不安な生活を強いられる都市生活者の姿を数多く見いだすことができるのである。

そして、その一人が、ここで、「へ私」やへ軽部となって登場してきていると考へても大過はないと思われる。特にへ軽部の生き方には、都市生活者の虚妄さが象徴的に描かれているようにも見えるのである。

へ軽部は、小林秀雄が「常識人」<sup>(注11)</sup>と規定してからは、その「暴力」性に言及する以外は、それほど注目されることはなかったが、留意すべき点がある。まだいくつが残っている。その一つが、「へ探偵」趣味である。

小説の記述を見てみよう。「へ私と一緒に働いてゐるこの職人のへ軽部は私が此の家の仕事の秘密を盗みに這入つて来たどこかの間者だと思ひ込んだのだ。」へ彼にとつては活動写真が人生最高の教科書で従つて探偵劇が彼には現実とどこも変らぬものに見えてゐるので、此のふらりと這入つて来た私がさう云ふ彼にはまた好箇の探偵物の材料になつて迫つてゐるのも事実なのだ。」

ここには、二つほど重要な事柄が隠されている。一つは、「へ探偵劇」の流行を背後で支える大衆、及び大衆化社会の出現であり、もう一つは、「へ探偵劇」という虚構<sup>フィクション</sup>に対する「現実」の接近——地縁・血縁による人間関係が崩れ、「へふらりと這入つて来」た見もしらぬ他者と関係を結ばざるをえない社会の出現ということである。そして、この二つは、同根の事象とも言へ、「へ街」（都市）の出現と一口で説明することも可能であろう。へ軽部という人物は、こうした状況を体現する存在であると言つてよく、娯楽に耽つて我を忘れる都市生活者の生活の虚妄さが、ここにかがえる仕組みになつてゐるのである。ちなみに、

「へ探偵物」の流行ということ言えば、私たちは、同時代の江戸川乱歩のいくつかの作品を知つてゐる。ここで詳述する紙幅はないが、江戸川乱歩の「へ探偵」小説の出現も、単なる大衆小説の流行現象と捉へるのではなく、「へ街」（都市）の形成にともなう都市流入者の増大、住居構造の変化、人間関係の変質、感覚・神経機能の分化とデフォルマシオン、といったいくつかの要素と関連づけて把握しなくては、何も見えてこないのではないだろうか。」<sup>(注12)</sup>

ともかく、へ軽部という存在は、こうした都市生活者の虚妄さを象徴しつゝ、「へ私」なる人物の立たされてゐる磁場——生活するための価値基準・行動原理の恣意性・曖昧性、及び生活の「へゲーム性」——をも照射してゐると考えられるのである。

次に移ろう。

## (2) ネームプレート製造所における人間関係の「へ中心」の喪失と、相対的關係性の磁場の出現。

この考え方は、もちろん(1)とも緊密に関連し合つてゐるのだが、この作品の舞台であり、「へ私」の「生活」の場でもあるネームプレート製造所には、確乎とした「へ中心」が欠落してしまつてゐることに注目しなくてはなるまい。作品冒頭から始まる主人の「へ狂人」性の説明と、製作所の「へ中心」の喪失との関係を整理してみよう。「主人の両義性については、後段で「へ私」との関係を詳しく見ていくつもりだが、ここでは、その客観的な人物像の分析を試みておく。」

端的に言えば、主人は暗愚者の存在である。冒頭に描かれてゐる彼の姿——「へ彼の子供が彼をいやがるからと云つて親父をいやがる法があるかと云つて怒り出したり、「へその子供がばつたり倒れるといき

なり自分の細君を殴りつけながらお前が番をしてゐて子供を倒すと云ふことがあるかと、不当な非難をあげたり、へ少し子供が泣きやむともう直ぐ子供を抱きかかへて部屋の中を馳け廻つたりする（四十男）の主人は、明らかに常軌を逸した（狂人）、もしくは暗愚者のイメージを漂わせている。こうしたイメージは、作品の随所に敷衍され、ある時は、（金属を腐蝕させる塩化鉄）によって、（頭脳の組織が変化）してしまつた人物として、ある時は、（金銭を持つと殆ど必ず途中で落してしまふ）無能者として、一定のイメージを形成していく。

このように、このネームプレート製造所は、（中心）に位置し、全ての機能を統御するはずの人物を、（狂人）（暗愚者）として喪つてしまつてゐるために、必然的に、その人間関係に奇妙な歪みが生じてしまふことになる。小説は、次のように続いてゆく。

（此の主人はそんなに子供のことばかりにかけてさうかと云ふとさうではなく、凡そ何事にでもそれほど無邪気さを持つてゐるので自然に細君が此の家の中心になつて来てゐるのだ。家の中の運転が細君を中心にして来ると細君系の人人がそれだけのびのびとなつて来るのももつともなことなのだ。従つてどちらかと云ふと主人の方に關係のある私は此の家の仕事のうちで一番人のいやがることばかりを引き受けねばならぬ結果になつていく。いやな仕事、それは全くいやな仕事で然もそのいやな部分を誰か一人がいつもしてゐなければ家全体の生活が廻らぬと云ふ中心的な部分に私があるのです。実は家の中心が細君にはなく私にあるのだがそんなことを云つたつていやな仕事をする奴は使ひ道のない奴だからこそだとばかり思つてゐる人間の集りだから黙つてゐるより仕方がないと思つてゐた。）

ここでは、（中心）は、どこにも定まることなく、集団構成員のあいだをめぐり続けている。（中心）に位置するのは、細君のようでもあり、また、（私）のようでもあるが、しかし、やはり、そのどちらでもなく、常に相対的な人間関係の渦の中で揺れ動いて止まないという力学的構造が透視できるのである。（注13）もちろん、栗坪良樹氏の言うように、（私）の人間観察が、（関係の因果性）に基づいてゐるといふ特徴も重視しなくてはならないが、厳密に言うならば、都市流入者である（私）に、そもそも生活していくうえでの主体的な価値基準・行動原理が欠落していたという前提があり、加えて、ネームプレート製造所そのものが、（中心）を喪失した相対的關係性に支配されてゐて、關係が全て因果的に流れていくという特質を持っていたといふことを看過してはならないと考えられるのである。

### (3) （塩化鉄）による（腐蝕）の危機。

では、この（中心）の喪失と相対的關係性の磁場の出現とは、どのような理由で生じたのか。換言すれば、主人を（狂人）（暗愚者）へと追いこみ、全体を統括する機能を果たさせなくしたものは、何だったのか。それは、（私）の次のような告知から、見当をつけることができる。

へもう私の頭もいつの間にか主人の頭のやうに早や塩化鉄に侵されて了つてゐるのではなからうか。ここには、（塩化鉄）による汚染への強い危惧が表出されているが、（塩化鉄）に対する認識は、さらに次のようにも語られていた。（此のネームプレート製造所でもいろいろな薬品を使用せねばならぬ仕事の中で私の仕事だけは特に劇薬ばかりで満ちてゐて、わざわざ使ひ道のない人間を落し込むやうに出

来上つてゐるのである。此の穴へ落ち込むと金属を腐蝕させる塩化鉄で衣類や皮膚がだんだん役に立たなくなり、臭素の刺激で咽喉を破壊し夜の睡眠がとれなくなるばかりではなく頭脳の組織が変化して来て視力さへも薄れて来る。この辺りから、主人を「狂人」(暗愚者)へと追い込んでいったものの正体が、「塩化鉄」による「頭脳」の「腐蝕」であったことが明らかになってくる。この認識は重く、横光は、作品後半で、屋敷の口を借り、周囲が一町四方全く草木の枯れてゐる塩化鉄の工場へ行つて見て来るやうにと、再度その危険性を説き、へ私達の立たされてゐる磁場が、いかに危険な「腐蝕」に曝されたものであるかを警告している。

とすれば、作品「機械」は、意外な拡がりや深さをもつて、我々の前に佇んでいることが明らかになってくるだろう。以上の(1)、(2)、(3)の視点——都市化にともなう地方から都市への人口流入と地縁・血縁の人間関係の崩壊の兆候、及び大衆化社会の出現、人間関係の「中心」の喪失と相対的関係性の磁場の出現、工業化学薬品等による「腐蝕」の危機の潜行、といった作品世界の基本的構造は、現代の「街」(都市)を生きる人間の根元的な生の位相をかなり本質的に浮かびあがらせていることができるのである。

以上は、作品分析の前提のようなものであるが、ここから先は、そのような難局に立たされた「私」なる人物が、いかなる価値基準・行動原理を選択し、「腐蝕」の危機に曝された相対的関係性の磁場のなかで、いかに主体的に生きていくか(もしくは、それがいかに不可能であったか)を見届けなくてはならないのである。以下、作品の展開にそつて、具体的に跡づけてみることにしよう。

前節で見たように、「私」なる人物は、地縁・血縁的人間関係から切り離された都市流入者で、自らの主体的な価値基準・行動原理が不分明な存在として登場していたが、もちろん、作品の展開のなかで、少しずつ変化を遂げてゆく。その最も大きな転換は、主人への接近ということであろう。

前節で規定した主人の暗愚者としての人物像は、「私」の思惑を度外視した客観的なものであったが、「私」は、その暗愚者としての主人に特別な思いを抱くようになり、彼に接近する姿勢を見せ始める。たとえば、「恐らく此処の家は主人のために人から憎まれたことがないにちがひなく主人を縛る細君の締りがたとひ悪評を立てたとしたところでそんなにも好人物の主人が細君に縛られて小さく忍んでゐる様子と云ふものはまた自然に滑稽な風味があつて喜ばれ勝ちなものでもあり、その細君の睨みの留守に脱兎のごとく脱け出してはすつかり金をを振撤いて帰つて来る男と云ふのもこれまた一層の人氣を立てる材料になるばかりなのだ。／そんな風に考へると此の家の中心は矢張り細君にもなく、私や、軽部にもない自ら主人にある」と云はねばならなくなつて来て私の傭人根性が丸出しになり出すのだが、どこから見たつて、主人が私には好きなんだから仕様が、ない」という言説は、「中心」の定まらないネームプレート製造所の内部に、好悪の感情に基づいた、自分なりの「中心」を設定しようとする試みと見なすことができるのである。

「へ金錢を振り撒いて帰つて来る」という要素は、それが直接の被害を惹きおこす場合、通常の生活者の価値観では、必ずといってよいほど負のものとなるのだが、この「へ私」は、それをへ一層の人氣を立てる材料として逆転させ、好意的に受けとめ、主人をネームプレート製造所の実質的な「中心」と規定し、頭上におしいただこうとしているのである。

「へ私」は、前述したように、この製作所とは地縁・血縁ではつながっていない、単なる賃金労働者にすぎなかったから、主人の奇行癖がそれほどダメージを与えるものにならなかったのかもしれないが、それにしては、「へ金錢」を媒介とする雇用——被雇用の関係も徹底されず、そうした関係など眼中にないかの如く、特殊な強い思いいれを主人に対して抱えていることがわかるのである。それは、「信徒」という言葉に象徴的なように、ほとんど宗教的な信頼関係になぞらえられる代物であって、この意味では、「へ私」の性向は、横光が昭和三年から断続的に書き続けていた「上海」の主人公・参木に非常に接近しているともなすことができるのである。<sup>(注15)</sup>すなわち、たたさされている立場は、「へ金錢」が支配するゲゼルシャフト（利益社会）に確実に移行しているにもかかわらず、ゲマインシャフト（共同体）内部にしか通用しえないような理念（ここでは、主人との宗教的な信頼関係）を求め続け、その存在の本質と状況との間で分断されてしまっている点で、参木の存在のありようと「機械」の「へ私」のそれとは酷似しているのである。

では、「へ私」が主人に接近することによって手に入れようとしたものは、何であつたのかを少し考えてみることにしよう。

「へ實際私の家の主人はせいぜい五つになつた男の子をそのまま四十に持つて来た所を想像すると浮んで来る。私たちはそんな男を思ふと全く馬鹿馬鹿しくて軽蔑したくなりさうなものにも拘らずそれが見て軽蔑出来ぬと云ふのも、つまりはあんまり自分のいつの間にか成長して来た年齢の醜さが逆に鮮かに浮んで来てその自身の姿に打たれるからだ。」

この引用で、鍵になる言葉は、「へ年齢の醜さ」であろう。例によつて、「へ私」は、主人の暗愚者ぶりをマイナス価値とはとらず、子供の持つ無垢性へと変換させ、そこにプラスの価値を与えようとしている。その時の決め手になるのが、無垢の対極にくる通常生活者の「へ年齢の醜さ」への嫌悪である。つまり、「へ私」は、通常生活者が「へ年齢」を重ねて手に入れる価値基準・行動原理を「醜」いものとして斥け、主人の無垢性の方向へ接近しようとしているのである。

このことは、小林秀雄の「無垢が無垢を知る撞着から歌は始まる」<sup>(注16)</sup>という評言に集約されて説明されている。「へ私」が主人を介して求めようとするものの一つが、通常生活者のものではない価値基準・原理であり、その一つの表徴が、従来よく指摘されてきた無垢性であったことは認めなくてはならないが、では、何故「へ私」は無垢性を希求するのか、また、「へ私」が主人を介して確認しようとしているものは無垢だけなのか、という点についても検討を加えてみなくてはならないだろう。

無垢とは、一言でいえば、世俗的価値観によって穢されていない状態の謂であらう。「へ私」には、生活するための価値基準・行動原理が初めから欠落していたから、無垢に対しては、親和的な心性を素地と

して所有していたことになるが、当初、主人のことを「狂人」とみなしていた「私」が、やがてその「信徒」になりたいとまで願うようになるには、ある契機がなくてはならない。それは、次のような箇所を読みとれると思われる。「赤色プレートの特許権」に関して、主人から相談をもちかけられた「私」が、細君や軽部から執拗な監視を受けようになった直後、再び、主人から「新しい研究」の説明を受け、助力を請われる場面である。

「私はいかに主人がお人好しだからと云つてそんな重大なことを他人に洩して良いものであらうかどうかと思ひながらも、全く私が根から信用されたこのことに対しては感謝をせずにはをれないのだ。いつた人と云ふものは信用されて了つたらもうこちらの負けで、だから主人はいつでも周囲の者に勝ち続けてゐるのであらうと一度は思つてみても、さう主人のやうに底抜けな馬鹿さにはなかなかなれるものではなく、そこがつまりは主人の豪いと云ふ理由になるのであらうと思つて私も主人の研究の手助けなら出来るだけのことはさせて貰ひたいと心底から礼を述べたのだが、人に心底から礼を述べさせると云ふことを一度でもしてみたいと思ふやうになつたのもそのときからだ。だが、私の主人は他人にどうかうされやうなどとそんなけちな考へなどはないのだからまた一層私の頭を下げさせるのだ。つまり私は暗示にかかつて信徒みたいに主人の肉体から出て来る光りに射抜かれてしまつたわけだ。長い引用となつてしまつたが、ここに、「私」の主人に対する宗教的と呼んでさしつかえない信賴の意志の発現を見ることが出来るのである。

前節で、「私」の「ゲーム性」ということについて少し触れたが、

この引用箇所の「私」には、そういった「ゲーム性」というものがかけても見いだせないことに、まず注意を払いたい。主人の言動は、確かに「私」の心の琴線をふるわせている。つまり、主人から「全く私が信用された」という事実が、「私」にとっては、実に大きなインパクトだったのである。これまでの「私」にとって決定的に欠落していたもの（そして、強く希求していたもの）は、この、人と人との全的な「信用」関係ではなかつたらうか。

たとえば、軽部や細君は、先にも見たように、地縁・血縁関係を持たぬ「私」を、ただそれだけの理由で「間者」扱いしたし、常に利害関係において、「使い道」があるか否かという視点でしか見てこなかつたのである。「私」が主人の言動にインパクトを受けたのは、彼が何の企みも計算もなく、「私」という流れ者に掛け値なしの「信用」を寄せてくれたからであり、相対的關係性の支配する磁場での、存在の抛りどころを垣間見させてくれたからである。「私」が主人を紹介して確認しようとしたものは、ある意味では、主人の無垢性ということにかわりないが、更にそれを厳密に規定すると、地縁や血縁によらない、「信用」関係による人と人との結びつきを可能にするところの無垢ということになるだろう。（ただし、それが、「街」《都市》という錯綜する人間関係の磁場で有効に作用するものであつたかどうかの検証は、別途におこなわなくてはならない）

しかし、「私」が主人を介して確認しようとしたものは、その地点にはとどまらない。「私」は、主人に学ぶかたちで、より広い関係の渦のなかでの自身のありやうを模索することになる。その模索の姿をもう一箇所だけ見てみよう。

へ或る日主人が私を暗室へ呼び込んだので這入つていくと、アニリンをかけた真鍮の地金をアルコールランプの上で熱しながらいきなり説明して云ふには、プレートの色を変化させるには何んでも熱するところの変化に一番注意しなければならない、いまは此の地金は紫色をしてゐるがこれが黒褐色となりやがて黒色となるともうすでに此の地金が次の試験の場合に塩化鉄に敗けて役に立たなくなる約束をしてゐるのだから、着色の工夫は総て色の変化の中段においてなさるべきだと教へておいて、私にその場でバーニングの試験を出来る限り多くの薬品を使用してやつてみよと云ふ。それから私は化合物と元素の有機關係を驗べることにますます興味を向けていつたのだが、これは興味を持って持つほど今迄知らなかつた無機物内の微妙な有機的運動の急所を、読みとることが出来て来て、いかなる小さなことにも機械のやうな法則が係数となつて実体を計つてゐることに氣付き出した私の唯心的な眼醒めの第一歩となつて来た。この引用箇所は、主人の導きによるへ私への眼醒めのプロセスが明瞭に読みとれて興味深い。主人の教へは、次のように要約できよう。無機物の内部にも微妙な有機的運動があつて、放つておくと塩化鉄に敗けて役に立たなくなつてしまふから、有機的運動のへ急所を確実に読みとつて、別種の新しい創造物を創出しなくてはならない、と。——この教えから、へ私へは、行為者として認識的にへ有機關係にコミットし、へいかなる小さなことにも機械のやうな法則がへ実体を形成していることを認識し、しかも、それをへ唯心的に受けとめ、自身の世界観の根幹に据えようとして模索している。

敷衍すれば、人と人との錯綜する關係によって形成されるネームプ

レート製造所を有機的運動体として認識し、その成りたちの根幹・へ急所に、へ機械のやうな法則の存在の可能性をみとめ、それを唯物的、或いは決定論的に受け入れるのではなく、人間精神を重視するへ唯心の立場に依拠しながら受容し、新しい価値基準・行動原理に基づく世界観を形成しようとして模索し始めているのである。

とすると、へ私へは、主人から二種の相異なる理念を学びとつたことになる。一つは、企みや計算によらない全的なへ信用へ關係に基づく人と人との結びつきであり、もう一つは、人と人との關係を有機的につないでいるへ機械のやうな法則の存在をみとめる人間精神のへ眼醒めである。前者は、無垢を志向し、後者は、分析と覚醒を志向する。前者が、前近代的、ゲマインシャフト的性格を持つとしたら、後者は、近代的、ゲゼルシャフト的性格を持つと言いかえてもよい。この一見性格の異なる二種の理念を、どのように統一していくかというところに、へ私への模索の実質があると判断してよいだろう。

しかし、もし、この統一が達成されないならば、へ私へは、二極の理念のあわいで、存在の分裂を運命づけられる。私達は、無垢を志向するへ私へと、分析と覚醒を志向するへ私との、内部の葛藤、自意識の振幅を、その分裂・解体の瞬間まで見届けなければならないのである。

### 三

結果から言つて、へ私への以上のような模索は、ついに不成功に終わる。へ暴力へをもつて迫ってくる軽部と、へ優れた智謀へをもつて

迫ってくる屋敷とのわずか二人の他者さえも、〈私〉は、完全にもてあまし、分析と受容のぎりぎりの涯で、他者と自己とをつなぐ架橋のあえなく潰えさってゆくのを実感する。その細部をいちいち検証していく紙幅は、もう尽きたが、たとえば、〈いつたい本当はどちらがどんな風に私を思つてゐるのかますます私には分らなくなり出した。しかし事実がそんなに不明瞭な中で屋敷も軽部も二人ながらそれぞれ私を疑つてゐると云ふことだけは明瞭なのだ。だが此の私ひとりにとつて明瞭なこともどこまでが現実として明瞭なことなのかどこでどうして計ることが出来るのであらう。それにも拘らず私たちの間には一切が明瞭に分つてゐるのかのとき見えざる機械が絶えず私たちを計つてゐるその計つたままにまた私たちを押し進めてくれてゐるのである。〉という言説には、〈私〉の分析（〈計ること〉）の有効性及びびえなくなつた地平に〈見えざる機械〉が出現し、〈私〉という存在を外側から翻弄する異物としてイメージされ始めていることが示されている。

〈唯心〉の立場にたち、〈機械のやうな法則〉の認識を、新しい創造物（人間関係）を創出するための価値基準・行動原理に据えようとした〈私〉の試みは、いまここで、本質的な危機に瀕しているといふべきなのである。〈私〉の分析の刃が、〈現実〉と切りむすばなくなり、やがて、自身の内部に閉塞する時、それは、自意識の跳梁となつて自身を切りきざみ始める。そして、外側からは、機械の鋭い先尖がじりじり私を狙つてゐるのを感じる」という危機に直面するのである。作品のラストで、〈誰かもう私に代つて私を審いてくれ。私が何をして来たかそんなことを私に聞いたつて私の知つてゐよう筈がないのだから〉と悲鳴が発せられる時、〈私〉の悲劇は、完了する。屋敷

の死という不慮の〈現実〉を前には、〈私〉の無垢も分析も、〈私〉を救出する何の機能をも果たしえない。ただ、屋敷を殺害する可能性のあつた自己を分析（自意識）し、殺人者としての自己を受容するだけなのである。

こうしてみると、〈私〉の模索は、現代の〈街〉（都市）を生きるものの新しい価値基準・行動原理をついに確立しえなかつたと結論せざるをえないと考えられるのである。単純化しようとして、人と人との全的な〈信用〉関係を生む無垢と、新しい創造物（人間関係）を生みだすための〈機械のやうな法則〉の認識・分析とは、少なくともここでは、両立をもち得ていないし、その両立の限りない困難さを予感させつつ、悲劇のうちに、作品は幕をとじるのである。

ここで、冒頭の問題提起にもどるかたちで、本稿のいちおうの結論をまとめておこう。

作品「機械」に登場する〈私〉なる人物は、〈街〉（都市）への流入者であり、主体的な価値基準・行動原理を初めから所有しない存在として出現していた。それは、地縁・血縁関係から切断された、〈中心〉のない相対的関係性の磁場で、不安な、そして虚妄な生を決定づけられた存在のありようでもあり、横光文学が、その新感覚派文学運動の中で掘りあてた、もつともポジティブな問題意識の塊りであつた。つまり、作品「機械」は、新感覚派文学運動（特にその、〈街〉もの）と緊密な連続関係を持っており、問題が、より鮮明な面貌をそなへ始めた作品と規定することができるのである。当然のことながら、ここでの模索は、継続執筆中であつたころの「上海」とも強い内的連関性をもつていて、ゲメインシャフトからゲゼルシャフトへと移行してゆ

く大きな転換のなかで、新しい存在基盤をどこに求めるのかという模索が一貫して追究されているのである。

〈私〉なる人物は、その存在基盤を、まず、人と人との全的な〈信用〉関係を成立させる無垢に求めようとした。これは、今や崩壊の危機に曝された精神共同体への還帰という要素をたぶんに含んでいたが、〈私〉の志向する方向は、もう一方にも延びていて、人と人をつなぐ有機関係を分析し、そこに〈機械のやうな法則〉の存在の可能性を認識し、それを〈唯心的〉に受容することによって、新しい価値基準・行動原理をうちたてようとするものであった。この二種のベクトルは、どういふかたちで統一されるのか。作品「機械」は、それが破綻・分裂の相をとり、悲劇のかたちで幕をとじることになった。しかし、それは、新たな問題追究の開始なのであり、もちろん路線変更などではなく、「上海」の後半や、「時間」などの作品によって、根源的なたちで追究されることになるのである。

(注)

1、拙稿「横光利一『時間』論——『機械』からの変質——」(『山口国文』昭59・3)。

2、保昌正夫「横光利一」(昭41・5、明治書院)。氏は、次のように述べている。へしかし、横光は『上海』全編を書き了えて、「機械」を書いたのではない。にも拘らず、「機械」と「上海」とはまったく異質の作であるかのように評価している向きはないであろうか。しかもこうした「上海」は新感覚派としての卒業制作で、「機械」は新心理主義の言挙げであったとする見方、横光がここで新感覚派から新心理主義に判然と変わったとする解釈、この作家の新感覚派としての在りかたと新心理主義を踏まえた姿勢とをまったく別個のものであるかのように扱う方法態度にはなにもぶんの

検討・是正を必要としまいか。

3、伊藤整「解説」(『現代日本文学全集36 横光利一集』、昭29・3、筑摩書房)。横光利一は昭和五年突然変化した。それは『改造』の九月号にのった「機械」である。「ユリシイズ」の翻訳が現れると同時にであり、それは明かに『文学』にのったブルウストの影響であったとある。

4、瓜生清「解説」(『新集近代の小説』「横光利一『機械』」の項。昭50・4、桜楓社)

5、高橋博史「横光利一『機械』を読む」(『国語と国文学』、昭59・12)  
6、〈私〉が〈九州の造船所〉をやめた理由については、作品になんの情報も与えられてはいないが、当時の経済不況や失業率の高さを考えると、一方的に解雇された可能性も出てくる。

7、江後寛士「横光利一『機械』試論——心理のゲーム性について——」(『近代文学試論』、昭42・6)

8、宮口典之「『機械』論」(『名古屋近代文学研究』、昭59・12)

9、作品の舞台を東京と確定できるのは、〈私〉が汽車の中で出会った婦人の〈東京の親戚〉がこのネームプレート製造所であることから判断できる。

10、東京百年史編集委員会編『東京百年史』第四卷(昭47・3、東京都刊)

11、小林秀雄「文芸時評——横光利一『機械』」(『文芸春秋』、昭5・11)

12、この点については、松山巖「乱歩と東京1920都市の貌」昭59・12、株式会社PARCO(出版局)に詳しい分析が展開してある。

13、伊藤整の指摘した「機械」の人間社会観——人と人、人と仕事、人と人との組合はせの動きによって、善意や努力と関係なく、人間は浮び上り、また破滅する。さういふ人間の組み合わせと社会条件の組み合わせの中に現代人の生きることの実体がある、といふ考え方——は、〈中心〉がないという作品構図のなかに定着していると考えるべきだろう。

14、栗坪良樹「鑑賞日本文学第14巻 横光利一」(昭56・9、角川書店)

15、「上海」の主人公・参木の人物像については、拙稿「横光利一『上海』論の試み」——参木の彷徨とへ日本〉意識の変遷——(『国文学』、

昭61・6)で考察した。

16、11に同じ。

(一九八六年九月二〇日稿了)

### 附記

横光利一の作品等の引用は、河出書房新社版『定本・横光利一全集』に拠った。仮名遣いは原文のまま漢字は現行の字体に改めている。